

【研究ノート】久留米大学教職課程年報 2018, 第2号, 71-75.

心理学科における高等学校公民の教科教育

園田直子^a・津田彰^a・木藤恒夫^a・原口雅浩^a・徳田智代^a・山本眞利子^a・浅野良輔^a・浦上萌^b (^a久留米大学文学部, ^b久留米大学人間健康学部)

【キーワード】高等学校公民, 教科に関する科目, 心理学科

高等学校の教員免許状は教科毎の免許状となる。教員を目指す者は、教員の免許状授与の所要資格を得させるための大学の課程（以後、「教職課程」と略す）において、教育職員免許法及び教育職員免許法施行規則の定める科目を履修しなければならない。すなわち、「教科に関する科目」「教科又は教職に関する科目」「教職に関する科目」より必要な単位数を取得する必要がある。本稿では、「教科に関する科目」に注目し、久留米大学文学部心理学科の高等学校公民の教員養成における「教科に関する科目」のあり方について検討し、2018年度からのカリキュラムの見直しについて報告する。

1. 教育職員免許法施行規則の「教科に関する科目」

日本の教員養成は教育職員免許法（昭和20年5月31日公布）と関連法規によって包括的に規定されており、免許取得に必要な最低修得単位数は「教科に関する科目」20単位、「教科又は教職に関する科目」16単位、「教職に関する科目」23単位と定められている。さらに、免許法施行規則第四条別表によれば、公民教員養成における「教科に関する科目」は「法律学（国際法を含む。）」「政治学（国際政治を含む。）」「社会学、経済学（国際経済を含む。）」「哲学、倫理学、宗教学、心理学」に分かれている。

久留米大学文学部心理学科では、高等学校公民の教員免許を取得できるようカリキュラムが準備されており、課程認定申請を行っているが、当学科のカリキュラムポリシーは教員養成に特化したものではないため、公民の教科科目に該当する科目が十分に準備されているかどうかについては議論の余地があった。

多くの開放性の教員養成を行っている大学では、公民はもともと教員免許が取得しやすい教科であり、課程申請を行っている学部・学科は非常に多い。本学でも、人間健康学部と文学部国際文化学科を除く全ての学部・学科（文学部社会福祉学科、文学部情報社会学科、文学部心理学科、法学部国際政治学科、法学部法律学科、経済学部経済学科、経済学部文化経済学科、商学部商学科）で取得できる。

文部科学省の資料によると、平成28年度時点で高等学校公民の免許が取得できる大学の学部は教育学部、社会学部、人間社会学部、経済学部、農学部、文学部、法学

部、社会福祉学部、商学部、等と多岐にわたっている。学科・コース等の専攻別にカウントすると、1075 専攻に及ぶ。これは、国語免許が取得できる専攻数が 214、英語が 447、数学が 455、理科が 748 と比べると非常に多いことがわかる。そのうち社会科学系の学部の中の社会系の学科（経営学科、法律学科、政治学科等）が大部分を占め、その中で心理学部、学科、は約 51 件で、その中の公民の教員免許を取得するための「公民コース」を設けている例を除くと約 45 件であり、全体の約 3.7%を占めるにすぎず、公民の教員免許が取得できる学部・学科・コースの中で「心理学」を専攻する学生は少数派であるといえよう。もちろん、どの大学においても心理学部（学科、コース）以外の学部・学科・コースで開講している科目を取得することで教科に関する内容を習得するように規定しているため、教科に関する学習を行うことは十分可能であると考えられるが、心理学という学問領域がどの程度公民という教科と関係があるかという議論はほとんどなされていないと思われる。

2. 心理学科で学ぶ公民の教科内容

以上の状況を踏まえ、次に高校公民の教科書の索引を参考に公民で学ぶべき内容と、本学の心理学科で開講している心理専門科目のシラバスにもとづき、両者がどれだけ対応しているかを明らかにし、心理学科のカリキュラムが公民の教員養成においてどのような役割を果たしているかを論じる。

本学において、2017 年度までは、心理学科の専門科目の中の公民の教科に関する科目は「健康心理学」「家族心理学」「カウンセリング心理学」「社会心理学Ⅰ・Ⅱ」「認知心理学Ⅰ・Ⅱ」「知覚心理学Ⅰ・Ⅱ」「福祉心理学」であった。文科省の資料では、公民の教科に関する科目を構成する科目のひとつを「心理学」としているだけで、公民の学習指導要領と心理学の領域を具体的に対応づけた資料はほとんどない。そこでこれらの科目が高等学校の公民の内容と対応しているかどうかを確かめるため、高校公民の教科書から心理学分野と関連のあるキーワードを抜き出し、本学で開講している科目とその内容とを対応づけた結果、それぞれのキーワードが心理学のどのような領域と関連があるかを示したものが表 1 である。

表 1 「現代社会」(東京書籍 平成27年度発行)の内容と心理学領域の対応および本学における担当者

| 1 キーワード | ページ | 対応する章・節のタイトル | 対応する心理学領域 | 担当者 |
|------------------|-----|--------------|-----------|------|
| 2 生命倫理(バイオエシックス) | 17 | 科学技術の発達と生命 | 知覚心理学 | 原口雅浩 |
| 3 脳死 | 17 | 科学技術の発達と生命 | 知覚心理学 | 原口雅浩 |
| 4 バイオテクノロジー | 18 | 科学技術の発達と生命 | 知覚心理学 | 原口雅浩 |
| 5 ゲノム | 19 | 科学技術の発達と生命 | 知覚心理学 | 原口雅浩 |
| 6 クローン | 19 | 科学技術の発達と生命 | 知覚心理学 | 原口雅浩 |
| 7 コーゼネレーション | 13 | 環境問題 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 8 安楽死 | 17 | 科学技術の発達と生命 | 健康心理学 | 津田彰 |
| 9 クオリティ・オブ・ライフ | 17 | 科学技術の発達と生命 | 健康心理学 | 津田彰 |
| 10 生命の質 | 17 | 科学技術の発達と生命 | 健康心理学 | 津田彰 |
| 11 生命倫理 | 17 | 科学技術の発達と生命 | 健康心理学 | 津田彰 |
| 12 尊厳死 | 17 | 科学技術の発達と生命 | 健康心理学 | 津田彰 |
| 13 インフォームド・コンセント | 18 | 科学技術の発達と生命 | 健康心理学 | 津田彰 |

(表1の続き)

| | | | | | |
|----|--------------|----|--------------|-------|----------|
| 14 | インターネット | 23 | 情報化の進展と生活 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 15 | マスコミュニケーション | 23 | 情報化の進展と生活 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 16 | マスメディア | 23 | 情報化の進展と生活 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 17 | IT革命 | 23 | 情報化の進展と生活 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 18 | バーチャル・リアリティ | 24 | 情報化の進展と生活 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 19 | インターネット | 25 | 情報化の進展と生活 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 20 | ネチケット | 25 | 情報化の進展と生活 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 21 | プライバシー保護 | 25 | 情報化の進展と生活 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 22 | インターネット | 26 | 情報化の進展と生活 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 23 | メディア・リテラシー | 27 | 情報化の進展と生活 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 24 | 高齢化率 | 28 | 現代社会の特質 | 家族心理学 | 徳田智代 |
| 25 | 少子高齢化社会 | 28 | 現代社会の特質 | 家族心理学 | 徳田智代 |
| 26 | 人口構成 | 28 | 現代社会の特質 | 家族心理学 | 徳田智代 |
| 27 | 老年人口 | 28 | 現代社会の特質 | 家族心理学 | 徳田智代 |
| 28 | 介護保険 | 29 | 現代社会の特質 | 家族心理学 | 徳田智代 |
| 29 | 核家族 | 29 | 現代社会の特質 | 家族心理学 | 徳田智代 |
| 30 | 合計特殊出生率 | 29 | 現代社会の特質 | 家族心理学 | 徳田智代 |
| 31 | 高齢化 | 29 | 現代社会の特質 | 家族心理学 | 徳田智代 |
| 32 | 高齢社会 | 29 | 現代社会の特質 | 家族心理学 | 徳田智代 |
| 33 | 少子化 | 29 | 現代社会の特質 | 家族心理学 | 徳田智代 |
| 34 | 少子高齢化 | 29 | 現代社会の特質 | 家族心理学 | 徳田智代 |
| 35 | イニシエーション | 30 | 現代社会における青年 | 発達心理学 | 浦上萌・園田直子 |
| 36 | 境界人 | 30 | 現代社会における青年 | 発達心理学 | 浦上萌・園田直子 |
| 37 | 心理的離乳 | 30 | 現代社会における青年 | 発達心理学 | 浦上萌・園田直子 |
| 38 | 青年期 | 30 | 現代社会における青年 | 発達心理学 | 浦上萌・園田直子 |
| 39 | 第2の誕生 | 30 | 現代社会における青年 | 発達心理学 | 浦上萌・園田直子 |
| 40 | 第2反抗期 | 30 | 現代社会における青年 | 発達心理学 | 浦上萌・園田直子 |
| 41 | マージナル・マン | 30 | 現代社会における青年 | 発達心理学 | 浦上萌・園田直子 |
| 42 | モロトリアム | 30 | 現代社会における青年 | 発達心理学 | 浦上萌・園田直子 |
| 43 | レヴィン | 30 | 現代社会における青年 | 発達心理学 | 浦上萌・園田直子 |
| 44 | アイデンティティ | 31 | 現代社会における青年 | 発達心理学 | 浦上萌・園田直子 |
| 45 | アバシー | 31 | 現代社会における青年 | 臨床心理学 | 山本眞利子 |
| 46 | エリクソン | 31 | 現代社会における青年 | 発達心理学 | 浦上萌・園田直子 |
| 47 | 個性 | 31 | 現代社会における青年 | 臨床心理学 | 山本眞利子 |
| 48 | 自分らしさ | 31 | 現代社会における青年 | 臨床心理学 | 山本眞利子 |
| 49 | ハヴィガースト | 31 | 現代社会における青年 | 発達心理学 | 浦上萌・園田直子 |
| 50 | 葛藤 | 32 | 自己形成と社会のかかわり | 臨床心理学 | 山本眞利子 |
| 51 | コンフリクト | 32 | 自己形成と社会のかかわり | 臨床心理学 | 山本眞利子 |
| 52 | 社会的欲求 | 32 | 自己形成と社会のかかわり | 臨床心理学 | 山本眞利子 |
| 53 | フラストレーション | 32 | 自己形成と社会のかかわり | 臨床心理学 | 山本眞利子 |
| 54 | フロイト | 32 | 自己形成と社会のかかわり | 臨床心理学 | 山本眞利子 |
| 55 | マズロー | 32 | 自己形成と社会のかかわり | 臨床心理学 | 山本眞利子 |
| 56 | 欲求 | 32 | 自己形成と社会のかかわり | 臨床心理学 | 山本眞利子 |
| 57 | 欲求不満 | 32 | 自己形成と社会のかかわり | 臨床心理学 | 山本眞利子 |
| 58 | インターンシップ | 33 | 自己形成と社会のかかわり | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 59 | パーソナリティ | 33 | 自己形成と社会のかかわり | 臨床心理学 | 山本眞利子 |
| 60 | ボランティア | 33 | 自己形成と社会のかかわり | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 61 | 生きがい | 34 | 進路と生きがいの創造 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 62 | ジェンダー | 35 | 進路と生きがいの創造 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 63 | ボランティア | 35 | 進路と生きがいの創造 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 64 | ワーク・ライフ・バランス | 35 | 進路と生きがいの創造 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 65 | ソクラテス | 36 | 哲学と人間 | 心理学史 | 木藤恒夫 |
| 66 | エロス | 37 | 哲学と人間 | 心理学史 | 木藤恒夫 |
| 67 | 無知の知 | 37 | 哲学と人間 | 心理学史 | 木藤恒夫 |
| 68 | アニミズム | 38 | 宗教と人間 | 心理学史 | 木藤恒夫 |
| 69 | アガペー | 39 | 宗教と人間 | 心理学史 | 木藤恒夫 |
| 70 | 近代科学 | 40 | 近代科学の考え方 | 心理学史 | 木藤恒夫 |
| 71 | 合理主義 | 40 | 近代科学の考え方 | 心理学史 | 木藤恒夫 |
| 72 | 人間中心主義 | 40 | 近代科学の考え方 | 心理学史 | 木藤恒夫 |
| 73 | 人間の尊厳 | 40 | 近代科学の考え方 | 心理学史 | 木藤恒夫 |
| 74 | モラリスト | 40 | 近代科学の考え方 | 心理学史 | 木藤恒夫 |
| 75 | 演繹法 | 41 | 近代科学の考え方 | 心理学史 | 木藤恒夫 |
| 76 | 帰納法 | 41 | 近代科学の考え方 | 心理学史 | 木藤恒夫 |
| 77 | 進化論 | 41 | 近代科学の考え方 | 心理学史 | 木藤恒夫 |
| 78 | 人間の尊厳 | 42 | 人間の尊厳 | 心理学史 | 木藤恒夫 |
| 79 | ヘーゲル | 42 | 人間の尊厳 | 心理学史 | 木藤恒夫 |

(表1の続き)

| | | | | | |
|-----|---------------|-----|------------------|-------|------------|
| 80 | 功利主義 | 44 | 人間の尊厳 | 心理学史 | 木藤恒夫 |
| 81 | プラグマティズム | 44 | 人間の尊厳 | 心理学史 | 木藤恒夫 |
| 82 | マルクス | 45 | 人間性の回復を求めて | 心理学史 | 木藤恒夫 |
| 83 | 和魂洋才 | 51 | 外来思想の受容と日本人の自覚 | 心理学史 | 木藤恒夫 |
| 84 | 功利主義 | 52 | 外来思想の受容と日本人の自覚 | 心理学史 | 木藤恒夫 |
| 85 | イニシエーション | 53 | 年中行事と通過儀礼 | 発達心理学 | 浦上萌・園田直子 |
| 86 | 多数決原理 | 55 | 民主主義の成立 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 87 | 子どもの権利条約 | 57 | 基本的人権の確立 | 家族心理学 | 徳田智代 |
| 88 | 夫婦別姓 | 62 | 基本的人権の保障 | 家族心理学 | 徳田智代 |
| 89 | 公共の福祉 | 63 | 基本的人権の保障 | 福祉心理学 | 非常勤(稲谷ふみ枝) |
| 90 | 教育を受ける権利 | 64 | 基本的人権の保障 | 福祉心理学 | 非常勤(稲谷ふみ枝) |
| 91 | 勤労の権利 | 64 | 基本的人権の保障 | 福祉心理学 | 非常勤(稲谷ふみ枝) |
| 92 | 公共の福祉 | 65 | 基本的人権の保障 | 福祉心理学 | 非常勤(稲谷ふみ枝) |
| 93 | 人格権 | 66 | 基本的人権の保障 | 福祉心理学 | 非常勤(稲谷ふみ枝) |
| 94 | 東日本大震災 | 76 | 内閣と行政 | 福祉心理学 | 非常勤(稲谷ふみ枝) |
| 95 | 家庭裁判所 | 78 | 裁判所と司法 | 司法心理学 | 非常勤(稲谷ふみ枝) |
| 96 | 世論操作 | 88 | 世論と政治参加 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 97 | マスメディア | 88 | 世論と政治参加 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 98 | フロム | 89 | 世論と政治参加 | 心理学史 | 木藤恒夫 |
| 99 | 夫婦別姓 | 91 | 世論と政治参加 | 家族心理学 | 徳田智代 |
| 100 | 公共の福祉 | 94 | 市民生活と法 | 福祉心理学 | 非常勤(稲谷ふみ枝) |
| 101 | 家庭裁判所 | 97 | 司法と人権 | 家族心理学 | 徳田智代 |
| 102 | 自己責任 | 100 | 他者とともに生きる | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 103 | 人間の尊厳 | 100 | 他者とともに生きる | 福祉心理学 | 非常勤(稲谷ふみ枝) |
| 104 | いじめ | 101 | 他者とともに生きる | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 105 | マルクス | 103 | 経済のしくみ | 心理学史 | 木藤恒夫 |
| 106 | 広告、宣伝 | 104 | 現代の企業 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 107 | 広告、宣伝 | 108 | 現代の企業 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 108 | 自己責任 | 115 | 中央銀行の役割と金融の自由化 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 109 | モラルハザード | 115 | 中央銀行の役割と金融の自由化 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 110 | 格差社会 | 126 | 日本経済の現在 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 111 | フリーター | 134 | 現代の雇用・労働問題 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 112 | リストラ | 134 | 現代の雇用・労働問題 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 113 | ワークシェアリング | 134 | 現代の雇用・労働問題 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 114 | 障害者雇用促進法 | 135 | 現代の雇用・労働問題 | 福祉心理学 | 浅野良輔 |
| 115 | セクシュアル・ハラスメント | 135 | 現代の雇用・労働問題 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 116 | ミスマッチ | 135 | 現代の雇用・労働問題 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 117 | 公衆衛生 | 136 | 社会保障の役割 | 健康心理学 | 津田彰 |
| 118 | 社会福祉 | 136 | 社会保障の役割 | 福祉心理学 | 非常勤(稲谷ふみ枝) |
| 119 | 介護保険 | 137 | 社会保障の役割 | 福祉心理学 | 非常勤(稲谷ふみ枝) |
| 120 | 社会福祉 | 137 | 社会保障の役割 | 福祉心理学 | 非常勤(稲谷ふみ枝) |
| 121 | 少子高齢化社会 | 137 | 社会保障の役割 | 福祉心理学 | 非常勤(稲谷ふみ枝) |
| 122 | 介護保険 | 138 | 社会保障の役割 | 福祉心理学 | 非常勤(稲谷ふみ枝) |
| 123 | ノーマライゼーション | 138 | 社会保障の役割 | 福祉心理学 | 非常勤(稲谷ふみ枝) |
| 124 | バリアフリー | 138 | 社会保障の役割 | 福祉心理学 | 非常勤(稲谷ふみ枝) |
| 125 | 自己責任 | 142 | 多様化する金融商品 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 126 | 少産少死 | 170 | 人口・資源・食料問題 | 家族心理学 | 徳田智代 |
| 127 | 少子高齢化 | 170 | 人口・資源・食料問題 | 家族心理学 | 徳田智代 |
| 128 | 人口構成 | 170 | 人口・資源・食料問題 | 家族心理学 | 徳田智代 |
| 129 | 多産少子 | 170 | 人口・資源・食料問題 | 家族心理学 | 徳田智代 |
| 130 | 多産多死 | 170 | 人口・資源・食料問題 | 家族心理学 | 徳田智代 |
| 131 | 都市化 | 170 | 人口・資源・食料問題 | 家族心理学 | 徳田智代 |
| 132 | 一人っ子政策 | 170 | 人口・資源・食料問題 | 家族心理学 | 徳田智代 |
| 133 | エスノセントリズム | 172 | 民族問題と紛争 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 134 | 子どもの権利条約 | 175 | 国際社会と人権 | 家族心理学 | 徳田智代 |
| 135 | フリーター | 180 | 若者の労働環境 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 136 | ミスマッチ | 180 | 若者の労働環境 | 社会心理学 | 浅野良輔 |
| 137 | 少子高齢化 | 185 | 少子高齢化社会における世代間格差 | 家族心理学 | 徳田智代 |
| 138 | 少子高齢化社会 | 185 | 少子高齢化社会における世代間格差 | 家族心理学 | 徳田智代 |

3. 本学における公民に関する教科の見直し

この表から明らかになったのは、公民の中の心理学に関連する内容は、主に「健康心理学」「社会心理学」「家族心理学」「臨床心理学」「発達心理学」「心理学史」「福祉

心理学」の7領域でカバーできるということである。2017年の本学の学則で規定されている科目と照合すると、「健康心理学」「家族心理学」「カウンセリング心理学」「社会心理学Ⅰ・Ⅱ」は対応しているが、「認知心理学Ⅰ・Ⅱ」「知覚心理学Ⅰ・Ⅱ」はほとんど対応していないといえる。また、2017年度は「福祉心理学」が休講であったという問題もあった。

このような観点から、2018年度から、公民の教科に関する科目を見直し、「発達心理学Ⅰ・Ⅱ」を教科に関する科目として追加し、「認知心理学Ⅰ・Ⅱ」および「知覚心理学Ⅱ」を除外することとした。2018年度以降の心理学科における公民の教科に関する科目を表2に示す。(注1)

表2 久留米大学文学部心理学科における高等学校公民の教科に関する科目の新旧対照表

| 免許法施行規則に定める科目区分 | 変更前 | 変更後 | 単位数 | 配当年次 |
|------------------|------------|--------------------|-----|------|
| 「哲学・倫理学・宗教学・心理学」 | 健康心理学 | 健康・医療心理学(科目名変更) | 2 | 2 |
| | 家族心理学 | 社会・集団・家族心理学(科目名変更) | 2 | 2 |
| | カウンセリング心理学 | 心理学的支援法(科目名変更) | 2 | 2 |
| | 社会心理学Ⅰ | 社会心理学(科目名変更) | 2 | 1 |
| | 社会心理学Ⅱ | 産業・組織心理学(科目名変更) | 2 | 2 |
| | 認知心理学Ⅰ | 発達心理学Ⅰ(新規) | 2 | 1 |
| | 認知心理学Ⅱ | 発達心理学Ⅱ(新規) | 2 | 3 |
| | 知覚心理学Ⅰ | 知覚・認知心理学(科目名変更) | 2 | 2 |
| | 福祉心理学 | 福祉心理学(変更なし) | 2 | 2 |

(注1) 科目名称は、公認心理師法に定める科目名に対応するための学則変更に伴い、2018年度から以下のように変更予定である。「家族心理学」を「社会・集団・家族心理学」に、「カウンセリング心理学」を「心理学的支援法」に、「健康心理学」を「健康・医療心理学」に「知覚心理学Ⅰ」を「知覚・認知心理学」に「社会心理学Ⅰ」を「社会心理学」に、「社会心理学Ⅱ」を「産業・組織心理学」に変更する予定。

参考資料

文部科学省 教育職員免許法(抄)

文部科学省 教育職員免許法施行規則(抄)

文部科学省 平成28年4月1日現在中学校・高等学校教員(社会・地理歴史・公民)

の免許資格を取得することのできる大学 通学課程 一種免許状

高等学校教科書 現代社会東京書籍 2017年度版

久留米大学 教職課程履修の手引き 2017年度版